

1969年のイスラエル・パラグアイ計画

1969年、イスラエルはガザからパラグアイへのパレスチナ人の自発的な移住を促進する秘密のイニシアチブを開始し、1967年の六日間戦争後の人口戦略として60,000人の移転を目標としました。この計画は1969年5月29日のシン・タフ/24決定を通じて正式化され、ゴルダ・メシア首相やモサド長官ズヴィ・ザミールを含む高官が関与しました。この計画は、パレスチナ人に金銭的インセンティブ、土地、仕事、文化的統合の支援とともに海外での新しい生活を約束しました。しかし、1970年にその失敗を露呈する暴力事件が発生する前に、わずか30人しか移転されず、計画は崩壊しました。関与したパレスチナ人にとって、この経験は深い欺瞞によって特徴づけられました。ブラジルでの未来を約束されたにもかかわらず、彼らは約束された資源や支援もなくパラグアイに置き去りにされました。この記事は、彼らの証言に焦点を当て、この不運な政策の人的コストを明らかにします。

計画の枠組みと約束

モサドが仲介し、ガド・グレイバー所有のイスラエル旅行代理店パトラを通じて調整されたこのイニシアチブは、ガザのパレスチナ人に魅力的なパッケージを提供しました。一時金として100ドル（今日では約750ドル）の支払い、旅行費の全額負担、受け入れ国での即時居住権、5年以内の市民権取得の道、農地、就労機会、言語支援を含む文化的統合のサポートです。アルフレド・ストロエスナー独裁政権下のパラグアイは、1人あたり33ドルの支払いと最初の10,000人に対して35万ドルの前払いで移民を受け入れることに同意し、彼らを農業開発の労働力として想定していました。

パレスチナ人にとって、これらの約束は特に魅力的でした。1969年のガザは経済的停滞とイスラエル占領の圧力に直面しており、パトラの募集活動でしばしば強調されたブラジルでの新たなスタートの展望は非常に魅力的でした。代理人はこのプログラムを、仕事、土地の区画、ポルトガル語の学習や文化的統合の支援を含む構造化された移転として売り込み、安定を求める絶望的な個人をターゲットにしました。確立されたアラブ系ディアスポラと経済的機会を持つブラジルの約束は、待ち受けていた現実と鋭く対照的でした。

パレスチナ人の証言：騙され、放棄された

パレスチナ人の証言は、明らかな裏切りを明らかにしています。鮮やかな物語の一つは、パトラを通じてブラジルでの仕事と土地、ポルトガル語の学習や活気あるコミュニティへの統合の支援を保證されたパレスチナ人、マフムードから来ています。彼は書類と航空券を受け取りましたが、アスンシオン、パラグアイに到着した際、騙されていたことを知りました。ブラジルはなく、仕事も土地も、文化的統合の支援もありませんでした。わずか100ドルの支払いと、実際の価値がほとんどない居住許可書だけでした。マフムードの物語は、参加した少数の者が直

面した欺瞞の象徴であり、見知らぬ国で資源やコミュニティもなく放棄されたことを示しています。

他の証言もこの放棄感を反映しています。移転した30人のパレスチナ人は、グアラニー語とスペイン語が支配するパラグアイの言語的・文化的景観を、約束された言語支援なしで乗り越えなければなりませんでした。約束された農地は実現せず、雇用プログラムも設立されませんでした。参加者はガザを去るよう「騙された」と感じ、構造化された移転の期待は孤立と無視の現実に打ち砕かれました。新しい社会に適応するために重要な文化的統合の約束は完全に欠如しており、個人はパレスチナ人のディアスポラの支援がない国で自力で生き延びなければなりませんでした。この放棄は、彼らが地政学的戦略の一部であり、真の機会の受取人ではないことを悟ったとき、裏切りの感覚を深めました。

1970年の大使館銃撃事件：破られた約束への反応

計画の崩壊は、1970年5月4日にアスンシオンのイスラエル大使館で起きた劇的な事件によって加速されました。2人のパレスチナ人移民、タルアル・アル・ディマッシとハレド・ダルウィシュ・カサブが、大使館職員のエドナ・ピアを射殺し、しばしば海外でのパレスチナ人テロの最初の事例と呼ばれました。しかし、背景はより複雑な物語を示唆しています。パレスチナ人は、約束されたモサドのエージェント（不動産や就労機会の手配を担当）が現れなかった後、大使館に支援を求めました。大使が彼らを拒絶し、懇願を無視したとき、彼らの苛立ちが暴力に爆発しました。

この事件は「テロリズム」というラベルの疑問を投げかけます。男たちの行動は、悲劇的かつ正当化できないものではありませんが、土地、仕事、支援の果たされない約束に対する絶望に根ざしているようです。イスラエルとパラグアイの両方から見捨てられたと感じ、彼らの攻撃は計画された政治的暴力というよりも、裏切りと無視への反応でした。この銃撃事件は計画を国際的な監視にさらし、アラブ諸国からの国連への苦情を引き起こし、イニシアチブを停止させました。それはまた、破られた匆々とした約束がパレスチナ人の失望の深さを強調し、憤りと絶望を煽りました。

果たされない約束の人的コスト

果たされない約束は、関与したパレスチナ人に深刻な影響を与えました：

- **経済的破壊**：100ドルの支払いは、パラグアイで生計を立てるには全く不十分で、仕事も土地も提供されませんでした。マフムードのような参加者は即座に困難に直面し、自活する手段がありませんでした。
- **文化的・社会的孤立**：言語支援や文化的統合プログラムがなく、パレスチナ人はグアラニー語とスペイン語が支配するパラグアイ社会への適応に苦労しました。パレスチナ人コミュニティの不在は彼らの孤立を悪化させ、ブラジルのアラブ系ディアスポラへの統合の約束とは異なりました。
- **心理的裏切り**：ブラジルを約束されながらパラグアイに送られた欺瞞は信頼を損ないました。イスラエルの人口戦略の駒であると気づいた参加者は、搾取と喪失の感覚に苛ま

れ、ガザに戻れないことがそれをさらに悪化させました。

- **強制移住：**プログラムの「自発的」な性質は、ガザの経済的圧力によって参加が強制されたため疑問視されました。目的地について誤解され、到着時に放棄されたことは、移住の感覚を深めました。

これらの証言は、計画の規模が小さいために限られていますが、搾取のパターンを浮き彫りにします。計画の失敗は、これらの約束を果たせなかったことに起因し、パレスチナ人を取り残し、パラグアイをさらなる関与に対して慎重にさせました。

倫理のおよび地政学的影響

計画の倫理的欠陥は明らかでした。パレスチナ人擁護者を含む批判者は、それが強制移住に近いものであり、ガザの絶望を利用してパレスチナ人口を減らすものだとして主張します。モサドの関与は、取引を仲介し、同時にパラグアイでのナチ狩りを停止したことで、操作の認識を高めました。1970年の銃撃まで隠されていた合意の秘密性は、非倫理的行為の告発を煽りました。パラグアイは、アラブ諸国からの反発を恐れてすぐに距離を置き、ストロエスナーは事件後に計画を中止しました。

パレスチナ人にとって、この経験は移住と裏切られた信頼の物語を強化しました。計画の小規模—30人だけを移転—はイスラエルの人口目標にほとんど貢献しませんでした。参加者に永続的な傷を残しました。人的コストは、戦略を人間性よりも優先する政策の結果を反映しています。

遺産と教訓

1969年のイスラエル・パラグアイ計画は、イスラエル・パレスチナ紛争の脚注に過ぎませんが、参加した少数の者への影響は深刻です。ブラジルでの未来—土地、仕事、文化的支援付き—を約束されながらパラグアイに放棄されたパレスチナ人の証言は、地政学的実験の人的コストを明らかにします。1970年の大使館銃撃は、約束されたモサドエージェントの不在と大使の拒絶によって引き起こされ、裏切られた者の絶望を反映し、「テロリズム」などの単純なラベルに挑戦します。

同様の移住提案に関する議論が浮上する中、これらの物語は警告として機能します。人口目標によって推進される政策は、1969年の失敗を繰り返さないために、透明性と本物の支援を優先する必要があります。関与したパレスチナ人にとって、この計画は果たされない約束の厳しい提醒であり、彼らの声は移住と欺瞞に直面した責任の呼びかけです。